

一．研究の目的

「生きる力」の育成をねらいとする新学習指導要領。国語科の目標には「伝え合う力を高める」という内容が掲げられた。一方、現実の問題として大学進学や就職のための小論文入試や作文に対応する必要もあり、小論文指導の目的は「伝え合う力の育成」と「入試等への対策」ということになる。

本研究ではその二つを小論文指導の目的と捉え、小論文指導における情報機器・視聴覚機器の効果的な使用方法の考察と実践方法（授業）の提案を行うものである。

二．研究の方法

小論文指導を効果的にすすめる上で大切なのはさまざまな機会を捉えて生徒に取り組みさせることであり、学校全体（教師全体）の協力を得ることで効果を発揮する。そうした指導体制を構築する際、生徒の「書く抵抗感を取り除き、意欲を高める」のが情報機器・視聴覚機器の使用であると考え、機器の使い方まで含めたテキストを作成し、授業実践によって効果を検証することにした。

三．テキスト（一年次用）に記載した内容

- ・小論文学習の意義（目的）
- ・小論文の定義
- ・小論文の基本的な構成・展開・型
- ・小論文にふさわしい書き方
- ・文章を書く手順と評価の方法
- ・情報機器・視聴覚機器の使い方
- ・小論文学習の継続方法

各項目について考察し、単元および授業を設計した。

四．授業実践（単元名「磨きあう小論文」）

1 学習のあらまし

進め方	学習内容	機器の使用
導入	テキスト ～ の理解，文章に説得力を持たせる方法の理解	
着想・取材	テキスト ・ ・ の理解，「フリーター問題」で書く授業開始，班による聞き書きと個人による材料集め	『ヤフー・ニュース』検索 《情報を印刷して配布》
構成	テキスト ・ ・ の理解，構成メモ作成	
記述	テキスト ～ の理解	『一太郎』による記述
推敲	テキスト ～ の理解	文書校正機能の活用
評価	テキスト ～ の理解（班で小論文を評価しあい、その後自己評価する。班代表の小論文から書き方を知る。）	で『一太郎』の付箋機能を用いた投影
学習のまとめとこれから	テキスト ～ の復習，の理解	テレビ番組の視聴，新聞社へのメールによる投稿

2 成果の検証

(1) 「設定した学習目標を理解できた」「授業に意欲的に臨めた」などの生徒の意識に成果が見られるか。

意見文（小論文）の書き方について、以前よりも分かったか。（分った・大体分った）100%
グループ活動（聞く）を通して、多くの「材料」を集めることができたか。（できた・大体できた）69%
小論文を書く際にワープロ・ソフトを用いることは便利だと思ったか。（思った・少し思った）89%
今後、意見文（小論文）を書く場合に、PCを使ってみようと思うか。（思う・少し思う）90%

ワープロソフトや PC の使用は、とくに記述と推敲の段階で意欲を生み、「書く内容が分からない」「書き方が分からない」という生徒の意識を解消できるという可能性を示した。

(2) 生徒の書く文章（授業実践前の意見文 授業で書く小論文）に成果が認められるか。

問題点が明確か 主張が明確か 事実に基づいた具体例の使用 「思った」「感じた」などの語の数 「私は～したい」「私が～なら」などの表現の数 不適当な語（俗語・話し言葉）の数 原稿用紙の使用に誤りがある箇所の数 段落の数 論理キーワードの数 常体が、敬体か

上記のほとんどの項目で変化が見られ、小論文らしい形ができた。

(3) 生徒評価（学習の評価）を行うことができるか。

授業の段階を基本とし、以下のデータをもとに学年や生徒の実態に即した「基準」を設け、評価を行った。

導入 演習（テレビは役に立つか）の内容
着想・取材 班および個人で集めた材料の個数
構成 構成メモの内容等
記述・推敲 「授業で書く小論文」の評価
すらすら読めたか、 主張がはっきりしているか
なるほどと思えたか、 おもしろい発見があったか
評価 班員で評価しあう中で各自が講評した個数

評価の個表を作成して生徒に返却した。書く際の技術として、高める必要がある部分を理解させるためである。

五．まとめ

検証(1)～(3)によって授業実践の成果を確認できた。機器の使用を含めた指導内容と指導方法を記載したテキストには以下のような効果がある。

一斉指導として、基本的学習の理解と定着を図ることができる。

「導入・着想・取材・構成・記述・推敲・評価」をたどって実践し、適時適切な指導や説明ができる。また、段階に沿った生徒評価が可能になる。

情報機器・視聴覚機器を取り入れた学習は、記述・推敲の段階で効果が実感でき、書く際の生徒の意欲は高まる。また、評価の段階で小論文を投影して理解の共有化を図る学習も効果的である。